

## マハティール政権をどう捉えるか

—Khoo Boo Teik 氏の講演会から—

左右田直規\*

1981 年以來、22 年間にわたってマレーシアの政権を担い続けたマハティール首相は、本年の10月をもってアブドラ副首相に政権を譲ることを表明している。政権転換期の今、ポスト・マハティール時代のマレーシア政治を展望するためにも、マハティール政権について総括を行う必要があるのではないだろうか。

マハティールの政治指導について、最も鋭利な分析を加えてきた論者の一人が Khoo Boo Teik 氏 (Universiti Sains Malaysia) である。主著 *Paradoxes of Mahathirism*<sup>1</sup> のなかで、Khoo 氏は、マハティールのイデオロギーをナショナリズム、資本主義、イスラーム、ポピュリズム、権威主義という5つの要素から捉え直し、矛盾をはらんだマハティールの思想を整合的に解釈するための視座を我々に示した。

日本学術振興会の招聘で今春来日された Khoo 氏に、3月10日に東京外国語大学にて “Some Issues in Malaysian Politics after Mahathir” という演題で講演をしていただいた<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> Khoo Boo Teik. 1995. *Paradoxes of Mahathirism: An Intellectual Biography of Mahathir Mohamad*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

<sup>2</sup> なお、本講演の内容に関連した Khoo Boo Teik 氏の論文として以下のものがある。 Khoo Boo Teik. 2002. The Myth of the Great Stabilizer: Reflections on Mahathir's Planned Departure.

春休みの海外調査シーズンと重なり、当日の参加者は10名程度にとどまった。

Khoo 氏の報告の焦点は、ポスト・マハティール時代を予測することよりも、将来の変化に備えて、マハティール現政権とマレーシア現代政治の構造を解明することに置かれた。以下、氏の報告を4つの論点を中心にまとめることにしたい。

まず第1に、マハティールの政治指導力を支える思想的な基盤を見る必要がある。マハティールの傑出した点は体系的かつ包括的な構想や世界観を提示する能力にある。それは具体的には、Wawasan 2020 (2020年構想) に見られる国家構想、通貨危機の際に示された経済ナショナリズム、穏健なイスラーム政策などにあらわれている。

第2に、より重要なのは、マハティールのイデオロギーを共有する政治的・経済的エリートの枢軸、すなわち「党 (UMNO) — 国家 (官僚制) — 資本家階級 (マレー人資本家)」という枢軸が存在することである。この枢軸は新経済政策 (NEP) の産物である。ただし、マハティール政権を支えるこの枢軸は政治経済環境に左右されやすく、どちらかという不安定である。実際、マハティール政権は決して安定政権ではなく、1980年代後半の UMNO の分裂、90年代後半のアヌワール

---

*Aliran Monthly* 22 (6): 2-7.

\* 東京外国語大学外国語学部

事件など、様々な危機に直面してきた。しかし、政治経済システムを支えてきたもう一つの枢軸、すなわち「国家(官僚制) - 外国資本 - 国内資本(マレー系、非マレー系)」という枢軸が政治的安定要因として機能してきた。こうした 2 つの枢軸を抱える政治経済システムはマハティール後も続くだろう。

第 3 の論点は、イスラームをめぐる政治的競合である。マハティール政権の穏健なイスラーム政策と一線を画し、イスラーム刑法導入を含むイスラーム国家建設を唱道するイスラーム党(PAS)が 1999 年総選挙で大幅に躍進し、クランタン、トレンガヌ両州の政権を握った。とはいえ、PAS の議席はマレー人有権者の比率が 3 分の 2 を超える選挙区に限定されている。大多数の非ムスリムが PAS の保守的なイスラーム政策に対して警戒感を抱いており、ムスリムの間にも PAS 流のイスラーム国家構想に否定的な層が一定程度存在する以上、PAS を核とする野党連合が連邦政権を掌握することは想像しがたい。2001 年 9 月 11 日の同時多発テロも PAS に対する逆風となっている。

第 4 のポイントは、マハティールが言うところの「第 2 のマレー・ジレンマ」、すなわち国家による優遇政策の恩恵を受けてきたはずのマレー人が、真の競争力を身につけることができず、国家に対する依存から脱却できないでいることである。通貨危機に際して多くのマレー系企業が経営危機に陥ったことはこのことの証左だった。政府介入型の優遇政策に変わる新しい政策構想が求められている時期なのだろう。

以上のような Khoo 氏の報告に引き続いて、自

由討論の時間では、テロリズムに対するマレーシアの対応、自由貿易協定のマレーシア政治への影響などについて意見の交換がなされた。ただ、氏の報告そのものを掘り下げた議論をあまり展開できなかったのは、少々もったいないことだった。討論の内容が拡散してしまったのは、進行役を務めた筆者の責任でもある。

筆者が個人的に興味を持ったのは、マハティール体制を「党(UMNO) - 国家(官僚制) - 資本家階級(マレー人資本家)」と、「国家(官僚制) - 外国資本 - 国内資本(マレー系、非マレー系)」という 2 つの枢軸から構成されるものとする視点だった。Khoo 氏はどちらかというと前者を政治的不安定要因、後者を政治的安定要因と捉えていた。しかし、よく考えてみると、国家とマレー系資本家はどちらの枢軸にも顔を出している。国家やマレー系資本家がいかなる場合に安定要因として働き、いかなる場合に不安定要因として機能するのか、ということを具体的な事例と照らし合わせながら、もう少し突っ込んで議論する必要があるように思う。また、Khoo 氏が *Paradoxes of Mahathirism* のなかで詳細に分析した 1990 年代前半以前のマハティール政権と比較した場合、現在のマハティールの思想と行動は、どの点が変わり、どの点が連続しているのかを解明したかった、とも感じる。この点については Khoo 氏の近刊書のなかで明らかにされるかもしれない。

最後に、多忙な日程を割いてお話をいただいた Khoo Boo Teik 氏、様々なご支援をいただいた鳥居高氏(明治大学)、ならびに当日参加して下さった方々に心より感謝申し上げたい。